

ハとガに関する平面式説明の提案

ーフローチャート式の対案としてー

A Counterproposal to the Flowchart Type Guidance for the use of Wa & Ga in the Education of Japanese as a foreign language

劉 志偉*

LIU Zhiwei

本稿は、日本語教育文法の観点から、野田氏と庵氏による一連の研究によって明らかにされたハとガの枠組みが重要であることを見た。ただし、母語話者の視点から提案されたフローチャート式の説明の仕方は、理解面において参考になる点が多いものの、産出につながるかどうかについてはなお議論の余地があると考ええる。また、説明に用いられる用語については、学習者にとって難解なものが含まれているほか、学習者が誤解または曲解しているものもある。そこで、筆者は学習者の視点から、最低限の用語説明に抑えつつ、学習者にとって分かりやすい平面式説明案を試みた。キーワード：ハ、ガ、フローチャート式、平面式、学習経験者

はじめに

授業中から生徒にハとガの性質の違いを聞かれ、その場で満足の行く答えを出せずにいたことが、山田孝雄（1875-1958）が国語研究を目指すきっかけとなった逸話は広く知られている（浅川・竹部 2014：414）。また、清国の留学生の指導にあたった松下大三郎（1878-1935）による記述も残されている（松下 1930：336-347）。このように、山田や松下を嚆矢としたハとガの研究は約100年の歴史を持つが、ガの本質とは何か（菊地 2010b：117）をはじめ、ハとガに関する研究にはいままなお様々な課題が残る。一方、日本語教育においては、「100%を目指さない文法」（庵 2011、2015）という考え方のもと、ハとガの用法や説明に必要な枠組みは、後述するように野田氏と庵氏による一連の研究で出揃っていると見ることができる。ただし、日本語母語話者の視点から考えられたフローチャート式の提示の仕方は、学習者にとって理解面では参考になるが、それを利用してうまく産出につながるかどうかについてはなお検討の余地がある。また、実際の術語に関しても学習者が誤解している等、看過できない面がある。そこで、本稿では、学習者の視点からフローチャート式の対案¹として平面的提示の仕方を提案する。

* りゅう・しい、埼玉大学大学院人文社会科学部研究科准教授、日本語教育学

¹ ここでいう「対案」は反対や対立を意味するものではない。フローチャート式を取る野田説と庵説はそれぞれ日本語母語話者と、独学能力をまだ持たず母語話者の手助け（説明）が必要な学習者を対象者としている面がある。これに対し、本稿の立場は、特に日本語の文法指導を受けた経験を持ち、すでに独学能力を有する学習者を対象としている。従って、本稿の提案は学習者から見た日本語を示すものであり、指導対象となる学習レベルの相違等から見て、フローチャート式と補完関係にあるとの見方も可能である。

1. 先行研究について

ハとガ（または「主題」と「主語」）に関する研究は「日本語文法の一環としてのもの」「学習者のためのもの」「対照研究の視点から見たもの」の三つに分けることができる。「日本語文法の一環」としての研究は、松下（1928、1930）、佐久間（1940、1941）、松村（1942）、三尾（1948）、三上（1953、1960、1963）、森重（1965）、尾上（1973、1981、1995、2004）、久野（1973）、原田（1973）、内田（1985）、柴谷（1985）、角田（1991）、寺村（1991）、仁田（1991、1997、2007）、青木（1992）、鈴木（1992）、菊地（1995、2010a, b）、堀口（1995）、益岡他（1995）、益岡（2004、2019a, b）、竹林（2004、2020）、丹羽（2004、2006）、日本語記述文法研究会編（2009）、堀川（2010、2012）、半藤（2015）等の研究を挙げることができる²。現代日本語のハとガについては野田（1996）が1つの到達点とされる。これに対し、「学習者のためのもの」に関しては、日本語学の研究から出発した野田氏と庵氏による一連の研究に代表される。そして、近年に限定してみても、日中対照研究として望月（1985、1986、1999）、佐藤（2000）、井上（2004）、澤田・中川（2004）、加藤（2009）、三宅（2014）等が多く発表されている。

このように、ハとガ関係の研究は、列挙する違がない程多くの蓄積がある。本稿では、日本語学を出発点とする野田氏と庵氏による日本語教育文法の説明において、ともにフローチャート式が用いられている点に注目したい。日本語母語話者ならそのフローチャート式に沿ってYES/NOで考えながら、ハとガの全体像を知ることができよう。しかし、内省を持たない学習者にとって、フローチャート式はハとガの使い分けを理解するのに役立つが、産出する際にはなお大きな壁を乗り越えなければならないものがあるように思われる。また、煩雑な「従属節」のタイプをはじめとする「節」や「文」の全体像、さらには「有題文」「無題文」「顕題文」「陰題文」「中立叙述」「総記」といった学習者にとっては難解な術語が大きな障害となっている。何より問題となるのが、「新情報」「旧情報」等の術語は、研究者はきちんと定義に基づいて用いているが、学習者は直感的にこれらの用語を用いており、実際は誤解または曲解しているという点である。

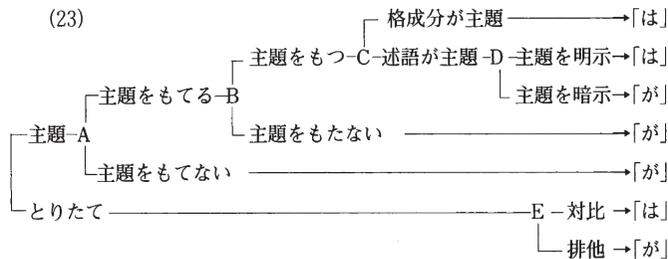


図1 野田（1996：117）

² 関連用語及び研究史については益岡（2019a, b）が詳しい。

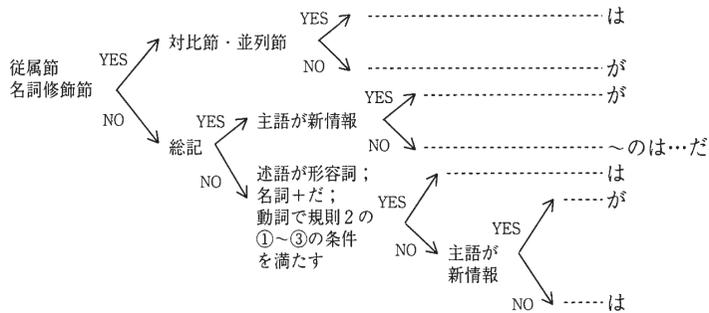
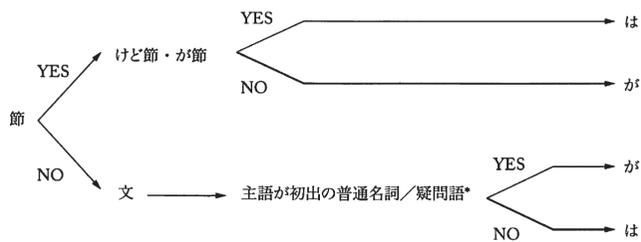


図2 庵・高梨・中西・山田 (2000 : 267)



ただし、*の規則でNOの場合で、述語が名詞+だ/形容詞のときに「が」を使うと「排他」の意味になる。

図3 庵 (2011 : 82)

なお、日本語と異なり、中国語にはハまたはガのような明示的なマーカーがほぼないこと³、中国語における「主語」と「主題」の概念に対する捉え方については研究者の間でもずれがあること（佐藤2000）の2点から、日中対照研究の成果を活かした母語を利用した教え方または学習方法は、ハとガの学習に向かないと言える。

日本語教育のための文法で勘案する場合、野田氏と庵氏による一連の研究成果は、ハとガの用法と全体の枠組みを説明するのに十分であることは前述の通りである。ただし、用いられた術語の一部に関しては、学習者が誤解または曲解している可能性が高い。以下、ハとガの違いを俯瞰的に捉えた野田（1995a）をベースに、学習者にとって必要な用語を提示しつつ、これらの用語に関してどのような落とし穴が潜んでいるのかを述べる。そのうえで、いわゆる「単文」と「複文」に分けて学習者の視点から考えた平面的説明方法を提案する。

³ 望月（1999 : 219）が指摘するように、「～に関しては」の意を表す「关于」「至于」等といった主題標識や、「今天的会议由我主持。（本日は私が司会を務めさせていただきます。）」のように動作主を示す標識「由」が存在する。

2. いわゆる「単文」におけるハとガの使い分け—用語に関する落とし穴を手がかりにしつつ—

野田 (1995a : 277) は、先行研究におけるハとガの使い分けに関する主な観点を以下のようにまとめている。

- (ア) ガ格の情報性—新情報にはガ、旧情報にはハ
- (イ) 文の種類—現象文にはガ、判断文にはハ
- (ウ) ガ格の係りかた—文末に係るときはハ、文末まで係らないときはガ
- (エ) ガのとりたてかた—対比的なときはハ、排他的なときはガ

とりわけ、問題点として「4つの観点の序列化」と「4つの観点の客観化」を挙げている点が示唆的である。この2点も学習者に提案する際に考慮に入れておかなければならないからである。このうち、(ウ) はいわゆる「複文」に関わる観点であるため、本節ではこれを除いた観点到現れる用語を確認する。

2-1 誤解または曲解される可能性の高い「新情報」「旧情報」

「新情報」と「旧情報」は、ハとガの使い分けを説明する際に重要な用語であることは言うまでもない。野田 (1995a) が述べたように、古くは松下 (1928, 1930) 「未定可変の概念」「既定不可変の概念」、松村 (1942) 「新しい概念」「既に固定した概念」等があり、かの久野 (1973) で用いられた「新しいインフォメーション」「古いインフォメーション」が最も有名であろう。

ここでは、どの箇所に注目して情報の新旧を判断するかに注目したい。「新情報」と「旧情報」について庵 (2012 : 259) では以下のように定義されている (下線は筆者による)。

旧情報はそれまでの文脈に登場していたり、話の現場に存在したりして (話し手及び聞き手が既に知っているものであり、新情報はそうではないものです。ここでは、「X {は/が} Y」という文型と情報の新旧の関係は次のようになります。

XはY (X : 旧情報 Y : 新情報) → 顕題文

XガY (X : 新情報 Y : 旧情報) → 陰題文

XガY (X : 新情報 Y : 新情報) → 現象文 (全体が新情報)

つまり、旧情報は係助詞のハの前のXを指すのに対し、新情報はガを含む「XガY」の全体を指すという点が特に重要である。しかし、学習者の間では、ハの前は旧情報で、ガの前は新情報という使用上支障をきたすようなルールが流布しているのである⁴。

⁴ 一橋大学庵ゼミ主催で、2018年6月に行われた山梨合同ゼミ合宿に参加した中国語を母語とする学習者に簡単なアンケート調査を実施した。協力者は計47名で、全員日本語学または日本語教育学を専攻とする大学院生である。「新情報」と「旧情報」を用いてハとガの区別をしている人は多数を占めるが、正確に両者を理解している者はいなかった。

二、記述問題（中国語での回答も可能です。）

■ハとガの使い分けについてどのように教わりましたか

（実際にどのように使い分けていますか）

「ハ」主語、「カ」主語と表わすと

「ハ」は旧情報、「カ」は新情報 と言うように教えられた。

実際には、新旧情報の視点から使います。

（裏面）

■ハとガの使い分けで「新情報」と「旧情報」の2つの用語を聞いたことがありますか。

Ⓐはい Bいいえ

「はい」と答えた方は、用例を挙げながら説明して下さい。

私はXX大学の学生です。

旧情報

太郎さんの妹が来ました。

新情報

（裏面）

■ハとガの使い分けで「新情報」と「旧情報」の2つの用語を聞いたことがありますか。

Ⓐはい Bいいえ

「はい」と答えた方は、用例を挙げながら説明して下さい。

— 田中さん、いらっしゃいますか。

— 私が田中です。

新情報

— 田中さんを知っていますか。

— 田中さんは大学時代の友達です。

旧情報

図4 アンケート調査の一部

しかも、学習者のみならず、現場でもこうした誤解が散見される。例えば、ある日本語教師養成講座のHPに以下のような用語説明がなされている。

新情報か旧情報かによって使い分ける方法。

会話の中や文脈で、主格となる名詞が未知（＝新情報）の場合は「が」を使って表し、既知（＝旧情報）の場合は「は」を使って表すという基準である。

- ・鈴木さんは校長です。（「鈴木さん」のことは「既知」なので、「は」を付けて表す）
- ・鈴木さんが校長です。（校長が誰であるのか、「未知」なので、「鈴木さん」に「が」を付けて表す）

(<https://yousei.arc-academy.net/manbow/index.php/term/detail/1031>)

ところが、新情報をガの前のみと見なす場合、例（1）において解釈の問題が生じる。つまり、教室で授業を受ける予定の庵ゼミの学生にとって庵先生という存在が未知な情報となるはずがない⁵。

（1）あっ、庵先生がいらっしやった。

これに対し、ハの前が旧情報という点に関しては、学習者にとっても馴染みのあるトピックの提示用法とされ、話し手は勿論、聞き手にとっても既に知っている情報であることは特に問題にならない。ただし、指導する際に、旧情報とは何か、即ち具体的にどのようなタイプがあるかについての提示が求められる。井島（2010：117）では、「旧情報」のタイプについて以下のように触れられている。

聞き手の知っている内容のことを「旧情報」、聞き手の知らない内容のことを「新情報」と呼ぶ。すなわち、主題は旧情報でなければならないが、旧情報には、対話をしている場にその事物があるから旧情報となる「直示」と、その場での話にその事物がすでに登場しているから旧情報となる「文脈」と、その場での話の以前からその事物を聞き手も知っているから旧情報となる「知識」との、3種類がある。

- ・（本を示しながら）この本は日本語の文法の本です。（直示）
- ・むかしむかし、お爺さんとお婆さんがありました。お爺さんは山へ芝刈りに、お婆さんは川へ洗濯に行きました。（文脈）
- ・鯨は哺乳類です。（知識）

このうち、「知識」のタイプは後述の「トピックのハ」に収めることが可能であり、スマートな提示として、「旧情報」に「（現場）直接指示」と「文脈による指示」の2つのみ言及しておけばよいかと思われる。

このように、「新情報」と「旧情報」を用いる場合、「新情報」の指す箇所はどこか、「旧情報」にどのようなタイプがあるのか、の2点を学習者に示す必要がある。そして、後述するが、産出する際にすべての文において「新情報」と「旧情報」を考える必要があるわけではないことも重要である。

⁵ 筆者自身は、同様の経験を経て、「新情報」と「旧情報」の両者の概念を確認するようになったのである。談話における新情報／旧情報とは別に、発見の「が」を設ける立場もあるが、例外扱いのための分類とも捉えられる。ハとガを説明するための分類としてスマートではない。

2-2 区別がつかなくなる「現象文」と「判断文」

「現象文」と「判断文」は、研究史的には三尾（1948）が出处とされる（野田 1995a : 278）。三尾の例として「雨が降っている」と「それは梅だ」がそれぞれ「現象文」と「判断文」と言われれば、学習者でも理解できる。ここでは、以下の2例を見られたい。

(2) 地球は丸い。（金水 2015 : 68）

(3) 月が美しい。（金水 2015 : 69）

前者は地球の性質を述べる「判断文」であることは分かりやすいが、後者に関しては学習者からすれば「現象文」とも「判断文」とも捉えられ⁶、同じ「星」なのにかたや「現象文」かたや「判断文」という「モヤモヤ感」が残る。言い換えれば、実際のところ、「現象文」と「判断文」で迷う可能性がある。

「現象文」については「物語り文（佐久間 1941）／中立叙述のガ（久野 1973）／現象描写文（仁田 1991）／事象叙述（益岡 2016）」、「判断文」については「品定め文（佐久間 1941）／主題のハ（久野 1973）／〈属性叙述＋事象叙述〉（益岡 2016）」等様々な用語が使われている（益岡 2019a, b）。学習者が理解しやすいという観点から、本稿では「現象文」の代わりに「眼前描写」⁷を用いる。「眼前描写」とは見たたり聞いたり感じたりした情報をありのまま述べることを指すが、具体的なタイプについての説明が重要となる。庵他（2001 : 319-321）では「眼前描写」について以下のように述べられている。

①発見

- ・見て。窓から富士山が見えるよ。
- ・（登山で山頂に着いた時）あー、空気がうまい。
- ・あっ、バスが来た。

②出来事を報告する

- ・昨夜中央自動車道でトラック3台の玉突き事故があった。
- ・（交番で巡査に）道にこんなものが落ちていました。
- ・明日、パーティーがあります。

③一般的法則的な帰結

- ・このボタンを押すと、お湯が出ます。

このように、具体例を挙げつつ、①②③がそれぞれ「（目の前が）どうした」「（過去において）こうだった」「（未来において）こうなる」に置き換えられると、学習者に分かりやすく説明することが可能である。

また、「判断文」については少し言葉を噛み砕いて「一般論を述べることである」と説明する。

⁶ 野田（1995 : 278）では「現象文」と「判断文」についてそれぞれ「現象をありのまま、判断の加工をほどこさないで、心にとつたままを、そのまま表現」「（課題）にたいして、話し手の主観が判断」と触れられているが、「月が美しい」という文に関してはどちらにも解釈できる。

⁷ この用語については尾上（1973）が早い。

なお、「新情報」「旧情報」に関連して、「一般論を述べる」場合、ハの前はトピックに該当する旧情報であるが、「眼前描写」に関してはその全体が新情報であるという説明を補足しておく必要がある。駐車場の標語「対向車が来る」（右図）を例に挙げると、いわゆる「新情報」は対向車が誰の車なのかが分からないということを目指すのではなく、「（この箇所は）対向車が来る（よ）」という標語を目にした人間に対する「新情報」の提示なのである。従って、「眼前描写」の場合、ガに前置する名詞句だけを見て、情報の新旧を判断してはいけないということになる。



2-3 母語話者にとっても難解な「総記」

ハの最も特徴のある用法として「対比」が挙げられる⁸。これに対して、ガの特徴的な用法が「総記」（「排他」とも）と呼ばれる用法であろう。しかし、「総記」という用語は久野氏による専門用語の訳語にして、母語話者にとってもピンとこない嫌いがある。また、学習者からすれば、AとBの二者を「対比」する場合も、「排他」の一種に見えてしまう部分がある。

ただし、学習者にとって「対比」はハの最もインパクト（認知度）のある用法であるため、「対比」という用語は必須である。これに対し、「総記」という用語の分かりにくさに鑑みて、「排他」を噛み砕いて「ほかではなく、これが～」というふうに説明する。

なお、これらの用法において、「強調」という説明を使つてはいけないこと（庵 2016：298）も併せて学習者に提示する必要がある⁹。

3. フローチャート式から平面式へ—いわゆる「単文」の場合—

いわゆる「単文」は、後述するように、「シンプルな文」で学習者に提示しても構わない。「シンプルな文」におけるハとガについては、ステップ1としてそれぞれの特徴的な用法「対比」¹⁰と「ほかではなく、これが～」を提示する。ここでいう「対比」は、「父は会社員で、母は主婦です。」のような明示的なものから、「お酒は飲まない。」のような、内容の背景に暗に比較対象が存在する暗示的なものまで連続的である。そして、後者の「ほかではなく、これが～」については特にアクセントに関する注意喚起を要する¹¹。

⁸ 「父が8代目、私が9代目の「長江惣吉」です。（クレイジージャーニー）」のように、「対比のガ」とも言える使い方はあるが、学習者にとって不要であろう。

⁹ 例えば、「これが一番いい」と「これは、素晴らしい！」のどちらも主観的に「強調」と認定できる。結局ハとガの使い分けの説明に役立つしない。

¹⁰ 「対比」の関連知識として、「私は野菜は食べない」「日本ではしない」のように、ガのほか、ヲ等の助詞に相当する箇所や、デ／ニに後続する位置にハが用いられることの提示も必要である。

¹¹ 「ラーメンが食べたい」には「スパゲッティ等ほかのものではなく、ラーメンだけが食べたい」という意味と、単なる願望希望の意志表出を表す「ラーメンが食べたいな」の2つの意味がある。アクセントによって意味が区別されるが、ここでは前者を指す。

表1 ステップ1

	ハ	ガ
ステップ1	<p>(1)意味「対比」: 明示的に両者を対比させる場合と、背後に対照的な存在を暗に示す場合がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・父は会社員で、母は主婦です。(明示的) ・お酒は飲みません。(暗示的) 	<p>(1)意味「ほかではなく、これが～」: 複数の候補の中から「これ」と選び取る。アクセントに注意。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・私がやります! ・これが一番いい!

特徴的な用法に続いて、ステップ2として「トピックのハ」と「眼前描写のガ」を提示する¹²。具体的には、前述の「一般論を述べる」用法も「トピックのハ」に含め、「トピックのハ」は概ね「～について言うと」「～に関して言えば」に置き換えられることを述べる。そして、「眼前描写」については「(目の前が) どうした/どうなっている」「過去はこうだった」「これからはこういう予定/(未来は) こうなる」の3つのタイプの情報があることを例示する。

表2 ステップ2

	ハ	ガ
ステップ1	<p>(1)意味「対比」: ・父は会社員で、母は主婦です。(明示的) ・お酒は飲みません。(暗示的)</p>	<p>(1)意味「ほかではなく、これが～」: ・私がやります! ・これが一番いい!</p>
ステップ2	<p>(2)「トピックのハ」: 「～について言うと」「～に関して言えば」に置き換えられること</p> <ul style="list-style-type: none"> ・彼は大学生です。 ・杭州は中国の有名な観光地です。 ・地球は丸い。(金水 2015 : 68) ・鯨は哺乳類です。(井島 2010 : 117) 	<p>(2)「眼前描写のガ」: 見聞きする(または見聞きした)ありのままの情報として「どうした」「こう(だった)」「こうなる」の3つあること</p> <ul style="list-style-type: none"> ・バスが来た。(目の前がどうした) ・海が綺麗!(目の前がどうした) ・昨日ここで事故が発生した。(過去はこうだった) ・明日、パーティーがあります。(庵他 2001 : 319) (未来はこう) ・(ボタンを押すと)お湯が出る。(庵他 2001 : 319) (こうなる)

以上の2つのステップを述べた後、以下のような細かい補足をする。

¹² 「あなたの人生はあなたが決める」のように「トピックのハ (or 対比)」と「ほかではなく、これが～」の両方が現れる例を提示してもよい。なお、「東京は渋谷に来ております」のようなハの特殊用法は学習者にとって気になる表現であるが(顧 2022)、産出する必要はない。このほか、いわゆる「ウナギ文」は、中国語で「我吃鰻魚(私はウナギにする)」のように、特にハの産出には支障をきたさない。

「新情報」と「旧情報」の区別は、ステップ1には必要なく、ステップ2においてのみ有効であること。ステップ2において、「トピックのハ」の前は聞き手にとっても既知の情報（既知の情報相当）であるが、「(現場) 直接指示」と「文脈による提示」の2つに分けられる。一方、「眼前描写」には3つのタイプがあり、ガの前後を含む全体が新しい情報となる。

4. 複文におけるハとガの使い分け—同じく用語の問題点に着目して—

4-1 学習者にとって判定に無理がある従属度の高低

日本語母語話者が複文におけるハとガの使い分けを考える際に、「節」という概念についての理解が必要であるが、学習者に提示するかどうか、どのように提示するか、どこまで提示するかについては詳しく後述する。ここでは、従来では広く言及されてきた従属節におけるハとガについて確認しておく。日本語学では南（1993）の影響が強く、従属節には従属度の高いものから低いものまで存在するとされる。

従属節におけるハとガに関連して、野田（1995：281）では以下のように言及されている。

ガしか使われない節（筆者注：従属度が高い従属節）

条件節：～タラ、～バ、～ト等

時間節：～マエ、～マデ、～トキ等

ハもガも使われる節（筆者注：従属度が低い従属節）

引用節：～ト

接続節：～ケレド、～ガ等

理由節：～カラ、～ノデ、～ノニ等

換言すれば、一般的には、従属度が高ければ、ガしか用いられず、従属度が低い場合はハもガも使えたとされる。

また、日本語教育の参考書等においてもこうした従属度説の影響を強く受ける面が認められる。

従属節には従属度の低いものと高いものがある。南（1993）によれば、従属度の低いものには、カラや引用節があり、主文とは独立して独自に否定、過去、丁寧、ウ/ヨウ、ムード（推量など）、主題（ハ）、副詞（たぶんなど）などを持つことができる。これに対し、ノデ、ノニ、連体修飾節、ト、タラ、ナラ、バなどでは、否定や過去などは独自に持つことができるが、それ以外は特に持てない。最も従属度の高いものがナガラやツツで、否定、過去、丁寧、ウ/ヨウ、ムード（推量など）、主題（ハ）、副詞（たぶんなど）のすべてを独自にもつことができない。（佐々木編 2007：264-265）

しかし、内省の利かない学習者が、自力で従属度の高低を使用してハとガを使い分けることは望めない。その理由を以下に述べる。例えば、従属度が最も高い「ながら」節はガのみ用いられる（野田 2018：55）とされるが、(5) のようにハを伴う用例も挙げられる。

(4) お父さんが新聞を読みながら、私に大学の生活について聞いてきた。

(5) お父さんは新聞を読みながら、朝食を食べていた。

後述する、どこまでが「埋め込み（構造）」の要素なのかや、ハとガの係る範囲の違い等、そして「主

語」「主題」別で考えた場合、構文レベル上両者が異なることは母語話者（研究者）の見立通りであるが、学習者からすれば、見かけ上ハもガも現れるのではないかと思ってしまうのである。しかも、それが多くの従属節に当てはまるため、結局のところ、いわゆる従属度によるハとガの使い分けは学習者にとって効果が限定的であると言わざるを得ない。

4-2 学習者にとって難解な「節」関連の用語の面々

前述の通り、複文を取り上げる際には「節」の説明（知識）が必要とされる。そもそも一般の学習者は（従属）節等を詳しく知らないため、「節」に関する一定の説明は不可欠であろう。また、ハとガを説明するに際し、「節」関連で「埋め込み構造」「形式名詞」「内的関係」「外的関係」「人魚構文」等が用いられることがあるが、一般学習者にとっては難解的でどこまで取り上げるかについては議論する余地がある。

ここでは「節」の全体像を示すために、体系的に示された前田（2020）を援用する。前田（2020：142）によれば、従属節は大きく「連体節」と「連用節」とに二分される。前者はさらに実質名詞を修飾する「名詞修飾節」と、準体助詞・形式名詞を修飾する（および助詞「か」を伴う「疑問節」「補足節」とに分けられる。これに対し、後者は連用修飾を成す「副詞節（従属的・非対等）」と、主節と並列関係を成す「並列節（独立的・対等）」とに二分できるという。

表3 従属節の分類（前田 2020：142）

連 体 節	補足節	名詞節	の・こと	
		引用節	と	
		疑問節	か	
	名詞修飾節	内的関係		
外的関係		内容補充修飾節		
		付随名詞修飾節		
	相対名詞修飾節			
連 用 節	条件節	順接条件節	と・ば・たら・なら	
		逆接条件節	でも・のに	
	原因・理由節	から・ので・ために・て（合格できて、うれしい。）		
	時間節	時・前・後・てから		
	様態節	ながら・ように・ほど		

	目的節	ために・のに・に
等位・並列節	等位節	が・けれども・(する)し・て (我が家では、妻は外で仕事をし、夫は)・連用形
	並列節	たり (～たり)、か (～か)

「連体節」と「連用節」には「埋め込み構造」¹³が多く含まれる。とりわけ、前者に関しては「補足節」(「名詞節」(～こと／～の)と「疑問節」(～か))のみならず、「名詞修飾節」における「埋め込み構造」はガの場合が多いとされる。

- (6) 現地の人々が食べる野菜を栽培している。(名詞修飾節、内的関係)
- (7) 住宅が燃え広がる画面が映りだされている。(名詞修飾節、外的関係)
- (8) 日本人が居るのは間違いない。(名詞節、外的関係)
- (9) 君が現地に行ってきたことを知っている。(名詞節、外的関係)
- (10) 彼が参加するかは分からない。(疑問節)

因みに、「名詞節」(「準連体節」とも)と「名詞修飾節」(「連体修飾節」とも)は、「形式名詞」か「実質的な意味を表す名詞」かの違いがあるほか¹⁴、「内的関係」か「外的関係」においても顕著な違いが認められる。つまり、「形式名詞」を修飾する「名詞節」は、一般的には「外的関係」に限定されるのに対し(前田 2010 : 174)、「実質的な意味を表す名詞」を修飾する「名詞修飾節」はこの限りではない。「名詞節」と「名詞修飾節」の違いを説明するのに、「内的関係」と「外的関係」は必要であるが、「連体節」の中にガ優勢の文型を取り上げる際には両用語は必ずしも必須ではない。

ところで、前田(2010)の指摘の通り、「名詞節」を構成する「形式名詞」の定義と対象範囲は研究立場によって大きく異なる。以下のような「予定」と「ところ」も「形式名詞」と見なした場合、同じく「埋め込み構造」にしていわゆる「人魚構文」¹⁵と呼ばれる構文においてはガのほか、ハも用いられることが明らかである。従って、「形式名詞」を修飾する「名詞節」のすべてがガしか使われないということは言えそうにない。

- (11) [太郎は名古屋に行く]予定だ。(角田 2011 : 53)
- (12) [太郎は今本を読んでいる]ところだ。(角田 2011 : 53)

これに対し、「埋め込み構造」を有する「連用節」の例として「～よう(に)」が挙げられることがある。

- (13) ものが落ちないようにしっかり止める。
- (14) 君が座席から落ちないようにずっと気を付けているからね。

しかし、どの部分が「埋め込み構造」にあたるかについては学習者にとって極めて判定が困難であ

¹³ 連体修飾節を「埋め込み構造」と見なさない立場もある。

¹⁴ 両者は連続的である(前田 2010)。

¹⁵ 中国語に「人魚構文」が存在するかどうかという議論もあるように、中国語話者にとっては馴染みのない構文と言える。

る。「対比」用法や、係り先等で見かけ上、ハも扱われる。

(15) ものは落ちないようにしっかり止める。(対比)

(16) 君は貴重品を落とさないように気を付けて下さい。(係り先)

ほかにも以下のようなものを挙げることができよう。

(17) 気象予報士が「明日は晴れです」と言った。

(18) 彼は「すぐ帰る」と私に言った。

(19) チョコが嫌いなんて一言も言っていない。

(20) チョコは嫌いなんて一言も言っていない。

(21) 傘が吹き飛ばされるくらい、強い風が吹いた。

(22) 君は私と肩を並べるくらい、大きく成長した。

(23) 傘が吹き飛ばされるほど、強い風が吹いた。

(24) 君は私と肩を並べるほど、大きく成長した。

また、多重の「埋め込み構造」もあり、学習者にとってその区切りの判定は容易ではない。

(25) ママが私は男運が悪いって。

(26) 本当の正解は私が嘸まないのである事だと思っているので、(もっと滑舌の練習をします)。

このように、「埋め込み構造」を用いた説明は、学習者にハとガの使い分けを説明するのにさほど意味がないと言える。

なお、「形式名詞」のその一部が「主節」を連用的に修飾するという面もあり、「形式副詞」と呼ばれるもの(内田 1975)の一部と重なる¹⁶。言い換えれば、「連体節」と「連用節」のどちらかに区分するかは定めにくく、連続的に捉える必要のあるものが多数存在する。「連用節」を構成する場合、前田(2010: 174-175)で述べた通り、接続助詞などのほか、「形式名詞」(形式副詞)による表現形式もある。

形式的な名詞を含む連用節

A 副詞節

- ①条件 薬を飲まない限り、熱は下がらない。
- ②原因・理由 薬を飲んだため、すぐに熱が下がった。
- ③逆条件 薬を飲んだ場合でも、熱は下がらないことがある。
- ④逆原因 医者が嫌なくせに、医者に頼っている。
- ⑤目的 薬を買うために、薬局へ行った。
- ⑥同時進行 テレビを見るかたわら、仕事をしている。
- ⑦様態 驚いた様子で、こちらを見た。
- ⑧時 お風呂に入ったあと、すぐに寝た。

B 並列節

- ⑨逆接 薬を飲んだところが、熱が下がらない。
- ⑩順接 薬を飲んだ上に、注射もした。

¹⁶ 「形式副詞」という用語は早くから山田(1908)に見られる。

①並列 クリスを飲んだ一方で、医者にも行った。

(前田 2010 : 175)

こうした複雑な様相を呈する「形式名詞」という用語は、学習者に混乱をもたらす恐れがあり、「節」等の説明において用いないことが無難であろう。

5. 学習経験者による提案—いわゆる「複文」の場合—

いわゆる「複文」におけるハとガの使い分けを説明する前提として、その全体像をある程度示す必要がある。4 節で述べたように、一般学習者にとって難解な「埋め込み構造」「形式名詞」「内的関係」「外的関係」「人魚構文」等の用語を取り立てて用いる必要がないことに鑑みて、「節」を用いた「文」に関する体系的な説明を、「主節」と「従属節」にとどめるという案も考えられる。

本稿では、文の全体像について劉 (2015 : 5) の発想を踏まえた上で、以下のように提示する。具体的には、学習者がイメージしやすいように、文には「シンプルな文」とそうでない「複雑な文」とに分ける。「シンプルな文」¹⁷は、いわゆる「一語文」を除いて、述語になりうるものが1つの場合である。「シンプルな文」におけるハとガの使い分けは3 節で述べた通りである。

一方、「複雑な文」は複数の「シンプルな文」によって構成され、述語になりうるものが2つ以上観察される。その構成の仕方によって「マトリョーシカ型」と「鎖型」、さらにこの両者が組み合わさった「複合型」の3 種類がある。従って、「複雑な文」におけるハとガの使い分けの説明は、「マトリョーシカ型」と「鎖型」におけるそれがカギを握る。

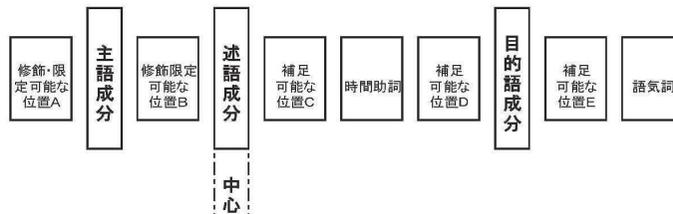


図5 中国語におけるシンプルな文のイメージ図 (劉 2015 : 1)

「マトリョーシカ型」は、「シンプルな文」を構成する成分として、別の「シンプルな文」になりうるものがその役割を担い、「(シンプルな)文」の中に「(シンプルな)文」が入っている(箱の中に箱が入っている)というイメージである¹⁸。これに対し、「鎖型」は、接続詞や接続助詞等(鎖かフックのイメージ)によって、「シンプルな文」が線状的に繋がれた長い文のことである。(当然のことながら、「複合型」は「マトリョーシカ型」と「鎖型」が多重構造を成すより一層複雑な場合を指す。)

¹⁷ いわゆる「単文」に相当する。

¹⁸ 身体部位や所有関係にある「象は鼻が長い」のような二重主語構文や、被害迷惑を表す受身の一種「(私は)足を踏まれた」は、中国語でそれぞれ「象の鼻が長い」「私の足が踏まれた」のように訳される。こうした日中両言語における顕著な違いが見られる構文は個別的に提示する。

「複雑な文」を構成する「シンプルな文」のうち、いわゆる「倒置文」を除いて文末に近い述語で作られるものがメインとなること（「主節」に該当する説明）を提示する必要がある。実際のところ、そのメイン以外のハとガの使い分けが学習者にとって問題となる。以下、メイン以外の箇所におけるハとガの使い分けと提示方法に焦点をあてる。

5.1「マトリョーシカ型」におけるハとガの使い分け

「マトリョーシカ型」では、「の」「こと」のほか、具体的な名詞を修飾するときや「か」を伴う場合でも、ガが優勢に用いられる文型がある。以下のようなものである。ここでは（□ヲ／ガVタイプ、動詞述語文）と称する。

- (27) 日本人がいないのは最初から知っている。
- (28) 彼が一人でUSJに行ったことがバレた。
- (29) 現地の人々が食べる野菜を栽培している。
- (30) 彼女が参加するかは分からない。

カバー率の高いルールとして、ガが優勢的に用いることをある程度提示しておく必要がある。一見簡単そうではあるが、意外に学習者が迷う箇所の1つである。

ただし、意図的に「対比」を意識した場合、「か」を伴う文型でハが選択される¹⁹。

- (31) (私は参加するけど) 彼女は参加するかは分からない。

また、「対比」のニュアンスが読み取れる、次のタイプの「マトリョーシカ型」の文型は、ハもガもごく自然に使えらる。ここでは（□Nだ、名詞述語文）タイプと称する。

- (32) [太郎は名古屋に行く]予定だ。(角田 2011 : 53)
- (33) [太郎が名古屋に行く]予定だ。(角田 2011 : 53 改変)
- (34) [太郎は今本を読んでいる]ところだ。(角田 2011 : 53)
- (35) [太郎が今本を読んでいる]ところだ。(角田 2011 : 53 改変)

とりわけ、「対比」を前面に出す場合は、ハが選択される。

- (36) (そこに) 日本人はいないの／はずだ。
- (37) (これは) 日本人は食べない野菜です。
- (38) 大切なのは、よく眠ることだ。(野田春美 2020 : 136) (暗示的)
- (39) 学生は勉強するものだ。(高橋 2020 : 3) (暗示的)

このように、「マトリョーシカ型」の場合、（□ヲ／ガV）タイプと（□Nだ）タイプの2つに着目する必要がある。とりわけ前者に関しては、ガが優勢的に用いられることをカバー率の高いルールとして提示する。これに対し、前者の「～か」文型と後者の□内の「シンプルな文」において「対比」（とくに打消しの表現を伴う場合）を前面に出す場合は、ハが選択されることも併せて提示する。

¹⁹ 「の」「こと」については「?(中国人はいないけど) 日本人はいるのは知っていた。」「?日本人はいないのは最初から知っている。」「?彼は一人でUSJに行ったことがバレた。」「?(私は) 彼は一人でUSJに行かないことは予想できる。」のように、話し言葉で言えそうな場合もなくはない。これに対し、「*(彼は) 日本人は食べない野菜を栽培している。」「*彼女は離婚したがる噂は聞いた。」のように具体名詞の場合は、「対比」の意図をもって使えない場合がある。ガを用いて誤用にはならないという点に鑑みて、「対比」のハは「か」に限定して提示すればよい。

5.2「鎖型」におけるハとガの使い分け

一般学習者からすれば、ハとガの両方が、ほとんどのいわゆる従属節に現れる点については前述の通りである。ここで重要なのは、そのハとガの「係る」範囲の説明である。野田（2018：55-56）では、「4.2「～は」と「～が」の係り先を理解するための文法」として以下のような重要な指摘がなされている。

「～は」と「～が」の係り先のこのような違いを適切に理解するためには、たとえば、次のようなことを知っている必要がある。

- a. 「～は」は、基本的に文末まで係っていく。
- b. 「～が」は、基本的にその後に出てくる最初の述語までしか係っていない。最初の述語を越えてその先まで係っていけるのは、述語が「～ながら」「～て」など従属度の高い節に入っているときだけである。
- c. 典型的な書きことばでは、「～が」は従属節の中の主語を表していることが圧倒的に多い。話しことばでは「私が行きます」の「私が」のように文の焦点を表していることがあるが、書きことばではほとんどない。

「～は」と「～が」の係り先を理解するためのこのような文法は、「読む」ための文法の1つとして必要である。「は」と「が」はほぼ必ず扱われている。しかし、文を読んで「～は」と「～が」の係り先を理解するという観点からの研究はあまりなく、日本語教育でもほとんど扱われていない。また、(c)で述べたような「どのような種類の文章・談話でどのような用法の「が」が多いか」という研究もほとんどない。

そのため、中級レベルの学習者の多くや上級レベルの学習者の一部は「～は」と「～が」の係り先の違いを認識していない。今後さらに、「～は」と「～が」の係り先を理解するための文法研究を進めていく必要がある。

これは、野田（1995a）でまとめられた4つ目の観点を具現化した説明で、「鎖型」の複雑な文を説明する際に、絶対必須なポイントではあるが、いわゆる従属度が学習者にとって応用しにくいといった問題点もある。本稿では、いくつかの注意点を抑えつつ、以下のように提案する。具体的には、2つのシンプルな文から成る「鎖型」をもって例示する。

前半の「シンプルな文」にあるハは、一般的に「複雑な文」の最後まで係るのに対し、ガの場合は「シンプルな文」の内部にとどまる。

この点を理解してもらうためには、庵（2012：86）の用例を援用する²⁰。

(40) 太郎は部屋に入ると、(WHO?)すぐに電気をつけた。(庵2012：86 改変)

(41) 太郎が部屋に入ると、(WHO?)すぐに電気をつけた。(庵2012：86 改変)

ただし、「係る」範囲に関する説明は、次の2つの注意点も断っておく必要がある。1つは、「係る」範囲の説明は、前半のシンプルな文と後半のシンプルな文にある「主語」を人間同士または物同士に限定して述べる必要がある。例えば、次の例では、「係る」範囲ではうまく説明されない。

(42) この座席は高いので、転落防止の為、深くお座りください。(埼玉大学ゆきのバス内の貼

²⁰ 用例自体にインパクトがあり、現象としても学習者が知っておかないといけないポイントである。

り紙)

もう1つは、「ながら」の場合、(46)のように前半のシンプルな文にガが現れ、後半のシンプルな文と同じ主語を持つ場合があるという点である。

(43) お父さんは新聞を読みながら、朝食を食べる。(用例5再掲)

(44) お父さんが新聞を読みながら、私に大学の生活について聞いてきた²¹。(用例4再掲)

このほかについては、前半のシンプルな文を3節で述べた平面的説明のルールに沿って、ハとガの使い分けを考える。

5.3「複合型」におけるハとガについて

「複合型」におけるハとガは、「マトリョーシカ型」と「鎖型」のそれに比べて、更に難易度は増すが、上で述べた「マトリョーシカ型」と「鎖型」のイロハを適応すれば、その使い分けをクリアすることも不可能ではなからう。

このように、「複雑な文」におけるハとガについては、まず「マトリョーシカ型」と「鎖型」におけるそれをそれぞれ理解した上で、さらに複合型へと進むという過程が必要である。

このほか、細かい補足説明として、ハの場合は係り先によって二通りの解釈が生じる場合があることも注目されよう。

(45) 花子がもう離婚したという噂を聞いた。(一択の解釈)

(46) 花子はもう離婚したという噂を聞いた。(二通りの解釈)

6. 結びにかえて

本稿は、日本語教育文法の観点から、野田氏と庵氏による一連の研究によって明らかにされたハとガの枠組みが重要であることを見た。ただし、母語話者の視点から提案されたフローチャート式の説明の仕方は、理解面において参考になる点が多いものの、産出につながる文法記述になっているかどうかについてはなお議論の余地があると考ええる。また、説明に用いられる用語については、学習者にとって難解なものが含まれているほか、学習者が誤解または曲解しているものもある。そこで、筆者は学習者の視点から、最低限の用語説明に抑えつつ、学習者にとって分かりやすい提案を試みた。具体的には、文を「シンプルな文」と「複雑な文」とに分け、「シンプルな文」においてはフローチャート式の対案として平面的な説明方法を取り上げた。そして、「複雑な文」を「マトリョーシカ型」と「鎖型」のほか、両者からなる「複合型」の3つに分けた後、「マトリョーシカ型」においてガ優勢の文型が存在することをまず提示する。次に、「鎖型」において係り先が重要であることを示し、細かい注意点を合わせて提示した。最後は、前述の平面的提示案を手がかりに総合的に判断するという手順となる。

当然のことながら、ハとガに関しては両者の使い分けのみならず、学習者にとって野田(1995b)

²¹ 「お父さんは新聞を読みながら、私に大学の生活について聞いてきた。」「新聞を読みながら、お父さんが／は私に大学の生活について聞いてきた。」も当然言える。

で取り上げられたハもガも使わない「無助詞の問題」や、三枝（2008）で取り上げられた複合助詞におけるハの脱落等の問題点もある。このほか、次の例に見られるように、産出のみならず、理解に支障を来たす問題点も看過できない。今後の課題としたい。

- (47) その光景を見ていると僕たちは生きる地球はさまざまな奇跡が作り上げてきたことを改めて感じることができるのだ。（『最後の楽園（スペシャル）』「巨大生物が集まる海～メキシコ・ユカタン半島～」）

参考文献

- 青木博史・高山善行編（2020）『日本語文法史—キーワード事典』ひつじ書房
- 青木怜子（1992）『現代語助詞「は」の構文論的研究』笠間書房
- 浅川哲也・竹部歩美（2014）『歴史的变化から理解する現代日本語文法』おうふう
- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘（2001）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 庵功雄（2011）「「100%を目指さない文法」の重要性」森篤嗣・庵功雄編『日本語教育文法のための多様なアプローチ』ひつじ書房、pp. 79-94
- 庵功雄（2012）『新しい日本語学入門—ことばのしくみを考える—（第2版）』スリーエーネットワーク
- 庵功雄（2015）「「産出の文法」に関する一考察—「100%を目指さない文法」再考—」阿部二郎・庵功雄・佐藤琢三編『文法・談話研究と日本語教育の接点』くろしお出版、pp. 19-32
- 庵功雄（2016）「「産出のための文法」から見た「は」と「が」」庵功雄・佐藤琢三・中俣尚己編『日本語文法研究のフロンティア』くろしお出版、pp. 289-305
- 庵功雄（2018）『一歩進んだ日本語文法の教え方2』くろしお出版
- 庵功雄（2020）「「は」と「が」の使い分けを学習者に伝えるための試み—「主語」に基づくアプローチ—」『言語文化』57、一橋大学語学研究室、pp. 25-41
- 井島正博（2010）「5.5.1 主題」沖森卓也編著『（日本語ライブラリー）日本語概説』朝倉書店、pp. 116-117
- 井上優（2004）「「主題」の対照と日本語の「は」」益岡隆志編『（シリーズ言語対照〈外から見る日本語〉）第5巻 主題の対照』くろしお出版、pp. 215-226
- 内田賢徳（1975）「形式副詞—副詞句の形相—」『国語国文』44-12、京都大学文学部、pp. 44-57
- 内田賢徳（1985）「（特集 主語論）主語的なる現象」『日本語学』4-10、明治書院、pp. 17-29
- 沖森卓也（2017）『日本語全史』ちくま新書
- 尾上圭介（1973）「文核と結文の枠—「ハ」と「ガ」の用法をめぐる—」『言語研究』63、日本語学会、pp. 1-26
- 尾上圭介（1981）「「は」の係助詞性と表裏的機能」『国語と国文学』58-5、東京大学文学部国語学国文学研究室、pp. 102-118
- 尾上圭介（1995）「「は」の意味文化の理論—題目提示と対比—」『月刊言語』24-11、大修館書店、pp. 28-37

- 尾上圭介 (2004) 「主語と述語をめぐる文法」尾上圭介編『(朝倉日本語講座 6) 文法Ⅱ』朝倉書店、pp. 1-57
- 加藤重広 (2006) 『日本語文法入門ハンドブック』研究社
- 加藤晴子 (2009) 「中国語の文頭成分」『東京外国語大学論集』79、東京外国語大学、pp. 47-64
- 金井勇人 (2021) 「作文におけるア系の指示詞について—《非-共同的共有知識》という観点から—」『日本語教育』179、日本語教育学会、pp. 16-30
- 菊地康人 (1995) 「「は」構文の概観」益岡隆志・野田尚史・沼田善子『日本語の主題と取り立て』くろしお出版、pp. 37-69
- 菊地康人 (2010a) 「日本語を教えることで見えてくる日本語の文法—「XはYがZ」文と「YがZ」句—」『日本語文法』10-2、日本語文法学会、pp. 22-38
- 菊地康人 (2010b) 「日本語の2種類の「文構成原理」と、「が」の「文構成上の機能」上野善道監修『日本語研究の12章』明治書院、pp. 117-133
- 菊地康人 (2021) 「日本語教育における「は」と「が」」『國學院雑誌』122-10、國學院大學、pp. 1-20
- 金水敏 (2015) 「5 日本語の文とその構造」月本雅幸編著『(放送大学教材) 日本語概説』放送大学教育振興会、pp. 64-95
- 久野暉 (1973) 『日本文法研究』大修館書店
- 小口悠紀子 (2017) 「上級日本語学習者の談話における「は」と「が」の知識と運用」『日本語教育』166、日本語教育学会、pp. 77-92
- 顧滌非 (2022) 「「東京は渋谷にきております」におけるハの用法に関する一考察」(発表資料)
- 小森万里・三井久美子 (2016) 『レポート・論文を書くための日本語文法』くろしお出版
- 三枝令子 (2008) 「複合助詞につく「は」—「について」と「{については}—」『一橋大学留学生センター紀要』11、一橋大学留学生センター、pp. 3-15
- 佐久間鼎 (1940) 『現代日本語法の研究』厚生閣
- 佐久間鼎 (1941) 『日本語の特質』育英書院
- 佐々木泰子編 (2007) 『ベーシック日本語教育』ひつじ書房
- 佐藤富士雄 (2000) 「主語、主題研究と中国語教育」『中央大学論集』21、中央大学、pp. 1-20
- 澤田浩子・中川正之 (2004) 「中国語における語順と主題化—主題化とその周辺概念を中心に—」益岡隆志編『(シリーズ言語対照〈外から見る日本語〉) 第5巻 主題の対照』くろしお出版、pp. 19-42
- 柴谷方良 (1985) 「(特集・主語論) 主語プロトタイプ論」『日本語学』4-10、明治書院、pp. 4-16
- 鈴木重幸 (1992) 「主語論めぐって」言語科学研究会編『ことばの科学5』むぎ書房、pp. 73-108
- 高橋雄一郎 (2019) 「形式語「こと」の日本語学習者による習得について」『専修人文論集』104、専修大学学会、pp. 93-116
- 竹林一志 (2004) 『現代日本語における主部の本質と諸相』くろしお出版
- 竹林一志 (2020) 『文の成立と主語・述語』花鳥社
- 角田太作 (2009) 『世界の言語と日本語—言語類型論から見た日本語—(改訂版)』くろしお出版(初

- 版 1991)
- 角田太作 (2011) 「人魚構文—日本語学から一般言語学への貢献—」『国立国語研究所論集』1、国立国語研究所、pp. 53-75
- 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味 (第Ⅲ巻)』くろしお出版
- 中西久実子・庵功雄 (2010) 『上級文法演習 助詞』スリーエーネットワーク
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 仁田義雄 (1997) 『日本語文法研究序説—日本語の記述文法を目指して—』くろしお出版
- 仁田義雄 (2007) 「日本語の主語をめぐって」『国語と国文学 84-6、東京大学文学部国語学国文学研究室、pp. 1-16
- 日本語記述文法研究会編 (2008) 『現代日本語文法 6 第 11 部複文』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会編 (2009) 『現代日本語文法 5 第 9 部とりたて、第 10 部主題』くろしお出版
- 丹羽哲也 (2004) 「第 11 章 主語と題目語」尾上圭介編『朝倉日本語講座 6) 文法Ⅱ』朝倉書店、pp. 257-278
- 丹羽哲也 (2006) 『日本語の題目文』和泉書院
- 野田春美 (2020) 「第 11 章 形式名詞述語文」井島正博編著『現代日本語文法概説』朝倉書店、pp. 130-140
- 野田尚史 (1985) 『セルフマスターシリーズ 1 はとが』くろしお出版
- 野田尚史 (1995a) 「ハとガー主題になっているガ格と主題になっていないガ格—」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法 (上)』くろしお出版、pp. 277-286
- 野田尚史 (1995b) 「ハとガと ϕ —ハもガも使えない文—」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法 (上)』くろしお出版、pp. 287-295
- 野田尚史 (1996) 『(新日本語文法選書 1) 「は」と「が」』くろしお出版
- 野田尚史 (2002) 「主語と主題—複合的な概念である「主語」の解体に向けて—」『月刊言語』31-6、大修館書店、pp. 38-49
- 野田尚史 (2018) 「日本語教育はどのように新しい日本語文法研究を創出するか—「聞く」「話す」「読む」「書く」ための文法の開拓—」『日本語文法』18-2、日本語文法学会、pp. 45-61
- 野田尚史 (2020) 「第 5 章 「は」と「が」」井島正博編著『現代日本語文法概説』朝倉書店、pp. 55-65
- 原田信一 (1973) 「構文と意味—日本語の主語をめぐって—」『月刊言語』2-2、大修館書店、pp. 2-10
- 半藤英明 (2015) 「「が」格の原理」『国語国文』84-8、京都大学文学部国語学国文学研究室、pp. 42-56
- 堀川智也 (2010) 「ガ格項の題目化をめぐって」上野善道監修『日本語研究の 12 章』明治書院、pp. 134-148
- 堀川智也 (2012) 『日本語の「主題」』ひつじ書房
- 堀口和吉 (1995) 『「～は～」のはなし』ひつじ書房
- 前田直子 (2006) 『「ように」の意味・用法』笠間書院
- 前田直子 (2009) 『日本語の複文—条件文と原因・理由文の記述的研究—』くろしお出版

- 前田直子 (2010) 「形式名詞」上野善道監修『日本語研究の12章』明治書院、pp. 165-177
- 前田直子 (2020) 「8 文法③ —日本語文法のトピック—」滝浦真人編著『(放送大学) 日本語学入門』放送大学教育振興会、pp. 141-156
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法—日本語文法序説—』くろしお出版
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版
- 益岡隆志 (1997) 『複文』くろしお出版
- 益岡隆志編 (2004) 『(シリーズ言語対照 (外から見る日本語) 主題の対照)』くろしお出版
- 益岡隆志編 (2008) 『叙述類型論』くろしお出版
- 益岡隆志 (2013) 『日本語構文意味論』くろしお出版
- 益岡隆志 (2016) 「叙述の類型と名詞句の構造」福田嘉一郎・建石始編『名詞類の文法』くろしお出版、pp. 215-232
- 益岡隆志 (2019a) 「日本語の主題と主語—叙述の類型の観点から—」藤岡克則他編『ことばとの対話—理論・記述・言語教育—』英宝社、pp. 35-51
- 益岡隆志 (2019b) 「日本語の主題と主語をめぐる研究史」言語の類型的特徴対照研究会編『言語の類型的特徴対照研究会論集』2、日中言語文化出版社、pp. 1-17
- 益岡隆志 (2021a) 「日本語主題構文と主観性」天野みどり・早瀬尚子編『構文と主観性』、くろしお出版、pp. 185-202
- 益岡隆志 (2021b) 『日本語文論要綱—叙述の類型の観点から—』くろしお出版
- 益岡隆志・野田尚史・沼田善子 (1995) 『日本語の主題と取り立て』くろしお出版
- 松下大三郎 (1928) 『改選標準日本語文法』紀元社
- 松下大三郎 (1930) 『増補校訂標準日本口語法』中文館書店 (勉誠社復刻版、1977)
- 松村明 (1942) 「主格における助詞「ガ」と「ハ」の問題」国語学振興会編『現代日本語の研究』白水社、pp. 365-408
- 三尾砂 (1948) 『国語文法論』三省堂出版
- 三上章 (1953) 『現代語法序説—シンタクスの試み—』刀江書院 (くろしお出版復刊、1972)
- 三上章 (1960) 『象は鼻が長い』くろしお出版
- 三上章 (1963) 『日本語の構文』くろしお出版
- 三上章 (1970) 『文法小論集』くろしお出版
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店
- 南不二男 (1993) 『現代日本語の輪郭』大修館書店
- 三宅登之 (2014) 「主語・述語」沖森卓也・蘇紅編著『(日本語ライブラリー) 中国語と日本語』朝倉書店、pp. 38-44
- 望月圭子 (1985) 「中国語における主語と主題」『言語・文化研究』3、東京外国語大学、pp. 51-57
- 望月圭子 (1986) 「漢語の主語構造」『中国語学』233、中国語学会、pp. 75-84
- 望月圭子 (1999) 「「は」と「が」—中国語を母語とする学習者への教授法—」『東京外国語大学百年記念論文集 (別冊)』、東京外国語大学、pp. 197-219

森重敏（1965）『日本語文法—主語と述語—』武蔵野書院

山田孝雄（1908）『日本文法論』宝文館

山田孝雄（1936）『日本文法学概論』宝文館

劉志偉（2015）「視覚的中国語語順の文構造モデルをめぐって—日本語の文の分類を踏まえつつ—」
『言語の研究』1、首都大学東京言語研究会、pp. 1-14

付記

論文執筆にあたって、小口悠紀子先生（広島大学）より様々なご教示を賜った。また、中嶋徹氏にもご協力頂いた。ここに記して御礼を申し上げる。